

- ① 研究を通して、生徒たちはどのような変化があったのか
- ② この研究で苦労したところは
- ③ 7つの視点はどのようにしてできたのか
- ④ 総合的な学習の時間におけるゲストティーチャーや地域人材は、どのように確保しているのか
- ⑤ 来年以降どのような形でいくのか、どのような見通しで授業をしていくのか

① 研究を通して、生徒たちにどのような変化があったのか

自信を持って自分の考えを伝えようとする生徒が確実に増えた。例えば日常生活において、道に迷い困っている外国の方を見かけた生徒が、状況を把握しようと英語で声をかけ、目的地まで案内し自然に助けられたという事例がある。これは、総合的な学習をはじめ国際交流や校外学習また教科横断的ユニット学習などで、多様な人々とふれあい発表する機会が増えたことが功を奏したものである。また、上海の修学旅行生や大学の留学生との交流を通して、外国の方と直接関わる機会が増え、外国の方に対する心理的な垣根が低くなったことが要因であると感じている。授業外の場面も含めこのような姿が、3年間の取組の成果であるといえる。

今後、外国人就労者が増える日本社会において、異文化を理解し、自分の土台を大切にしながら関わる力を育てることは、子どもたちにとって大きな意義と喜びであると考えている。

② この研究で苦労したところは

研究を進めるにあたり、「グローバルとは何か」という根源的な問いを出発点として、校内における継続的な協議や検討を重ねてきた。その中で、最も苦労した点は「グローバル人材」の定義及びその具体像を明確に設定することであった。英語科のみに焦点を当てた研究ではなく、学校における教育活動全体を通じてグローバル人材の育成を図るために、各教科等がその主体となることへの理解及び授業実践を形成するまでに時間と議論を要した。また、発信力の強化を目指すにあたり、「誰に、何を、なぜ伝えるのか」という視点を教育活動の中でどのように具体化するかも課題であった。単なる表現活動に終始するのではなく、生徒が自分自身の思いや考えを持ち、それを言語化しようとする態度を育成する授業づくりの重要性を改めて認識した。さらに、授業で育まれた力を授業外の場面でも発揮させるために、どのような仕組みや機会を設定すべきかについても検討を重ねる必要があった。

③ 7つの視点はどのようにしてできたのか

本研究における「7つの視点」は、教育活動全体を通じてグローバル人材の育成を図っていくというねらいのもと設定した。設定に当たっては、次の2点に留意した。第一に、日々の授業の中で、生徒が自分の考えを持つことを出発点として整理したことである。第二に、授業者が授業を組み立てる上での単元構想の視点として役立てるものとして設定したことである。知識や技能を一方向的に教授するのではなく、学びを通して生徒に「自分はどのように考えるのか、自分ならどうするのか」と問い続ける姿勢を育むことを重視した。社会的な課題を自分ごととして受け止め、それを他者と共有し、さらに深めていく学びは、全ての教科・領域に共通するものであると考える。7つの視点を、各教科が連携しながら生徒の資質・能力を育成するための共通の視点として設定した。

④ 総合的な学習の時間におけるゲストティーチャーや地域人材は、どのように確保しているのか

地域人材の確保にあたっては、「学校が何を目指し、何を企業等の外的資源にお願いしたいのか」を明確にすることを大切にしている。「学校とつながりたい」と考えている企業や大人は我々の想像以上に多く存在しており、いずれの機関、人が協力的であった。つながりのきっかけとしては、市役所(地域おこし協力隊等)や商工会議所青年部(諫早 YEG)、地域の NPO 法人など、公的・中間支援的な組織を活用した。また、保護者の協力も大きな力となっており、保護者にゲストティーチャーとして授業に参加してもらうことで、生徒・教員・保護者の相互理解が深まり、学びが広がられた。

⑤ 来年以降どのような形でいくのか、どのような見通しで授業をしていくのか

来年以降の具体的な形は未定だが、県教育委員会の指定が終わっても、「グローバル人材育成の教育活動」は本校の特色ある教育活動として継続していく。柱は大きく二つある。

一つ目:授業改善である。

7つの視点の見直しやそれを生かした指導の改善に努める。もう一つはユニット学習である。緩やかな教科ユニットと、本格的な教科横断学習を継続して実践する。どちらも、教師の指導力向上に寄与するものとする。

二つ目:総合的な学習の時間である。

探究的な活動を通して個人で学びを深めるとともに、地域の大人や保護者と協働した学びを進めていきたい。

今後は、教師主導だけでなく、生徒自身が「なぜその企業・人とつながりたいのか」を理由や根拠をもって考え、関係を築いていく学びが重視されていくと考えられる。